

置に、上記のような攻防の経過が関与していることは、その位置を示すためのものであったと考えられる。は明らかであり、本図のやや詳しい丘陵地の等高線



図5. ②「威遠堡門附近之圖」(2万分1)

原図×0.45。

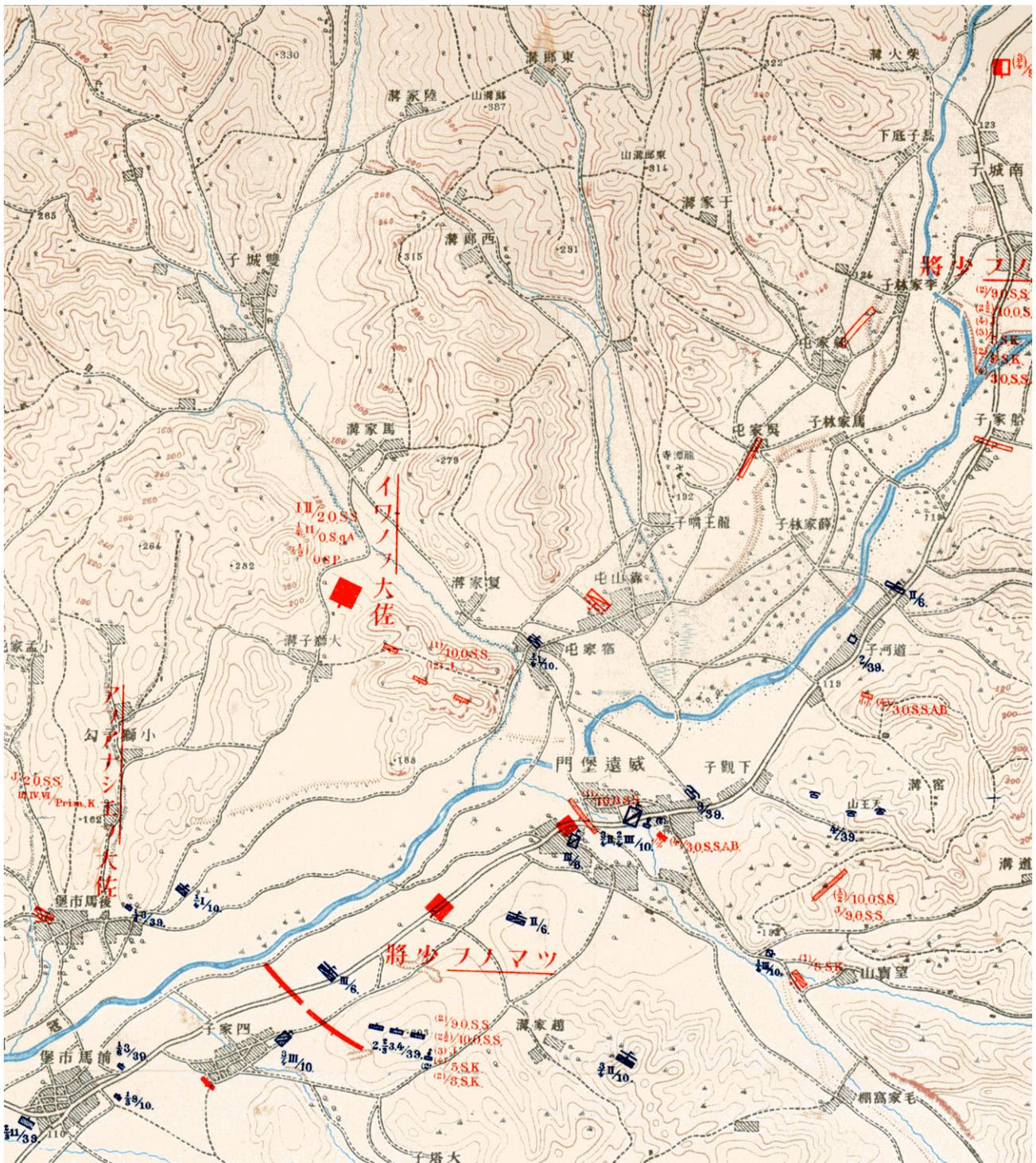


図6. 威遠堡門附近第十師團獨立騎兵之戦闘 (1905年4月22日、5万分1)

原図 (5万分1) × 0.88.

出典：参謀本部 (1914b) の附図第三。

③ 吉林街道（仮称）（図7）

威遠堡門の集落の北東方一帯を図示する。左上（北西）に威遠堡門より二道河子へと通じる道路（「吉林街道」と称している）を描き、その途中に下坎（觀）子の小集落をしめす。その南東にひろがる丘陵地には、青鉛筆で掩体や鹿柴を描き、「平山」、「因幡山」、「播磨山」、さらに「天王山」と日本風の地名を記している。このうち天王山は図6にも見えている。

図6と比較して本図の縮尺を算出すると、1万分の1程度となる。なお、この付近の4月22日の戦闘については、上記（18頁）および参謀本部（1914a: 57-59）を参照。天王山では、歩兵第三十九連隊第四中隊が守備にあたっていたが、ロシア軍の圧迫が強くなれば、南方の毛家窩棚西方高地に移動することになっていた（図6参照）。

④ 「二道河子附近之圖」（図8）

本図の測図エリアは威遠堡門の北方に位置する二道河子周辺である。本図も道路の方位などは地形図（図9）とよくあうとは言いがたく、「目算測図」による可能性が高い。

本図でも、二道河子の集落のまわりや船房（家）子などに掩体、鹿柴などの記号が描かれているのは、上記のような4月22日のロシア軍との攻防が関与していると考えられる。

地名については、当て字あるいは省略化されているところがある。下觀 [guan] 子を下坎 [kan] 子と当て字しているほか、龍王咀子を龍咀子と省略化している。他に、差路満（図9参照）を「チャラゴウ」と、カタカナのみで表記している。



図7. ③吉林街道（仮称）

原図×0.38。

⑤ 「見取圖」(南城子付近) (図 10)

本図は④「二道河子附近之図」(図 7) の北側の地域を描く図である。南西端にみえる船家(房)子は、④「二道河子附近之図」の中央北側にみえている。また北方では、つぎに述べる⑥「見取図」(歙喜嶺附近) (図 12) の図示範囲も含んでいるだけでなく、さらに遠方の蓮花街までも図示する。南城子は、北西方(後述する孤榆樹方面)、北北東方(歙喜嶺・蓮花街方面)、さらに東方(後述する陶[掬]鹿方面)に向かう谷底平野が出合うところに位置しており、要地であったと考えられる。

本図は、対応する地域の地形図(図 11)と比較すると、全体として一致度が高く「路上測図」の方法を用いたと推定される。

本図には縮尺(五万分一)のほか、作製時期(1905年6月)および測図者(歩兵大尉大倉熙)、さらに作製者(第十師団参謀部)を記している。「路上測図」や「目算測図」などでは、図を完成した際、題目、道程、縮尺、年月日および作製士官の氏名を記入するのが規則とされており(白幡 1892: 86)、これはそれに従ったものといえよう。

記入された時期から、表 3 にみえるこの地域の戦闘の過程の最後の段階で作成されたことがわかる。ロシア軍の南下(6月7日)、さらにそれに対する日本軍の反撃に関連していると考えられる。この時期の情勢について、『明治卅七八年日露戦史』の示す要点はつぎのようになる。

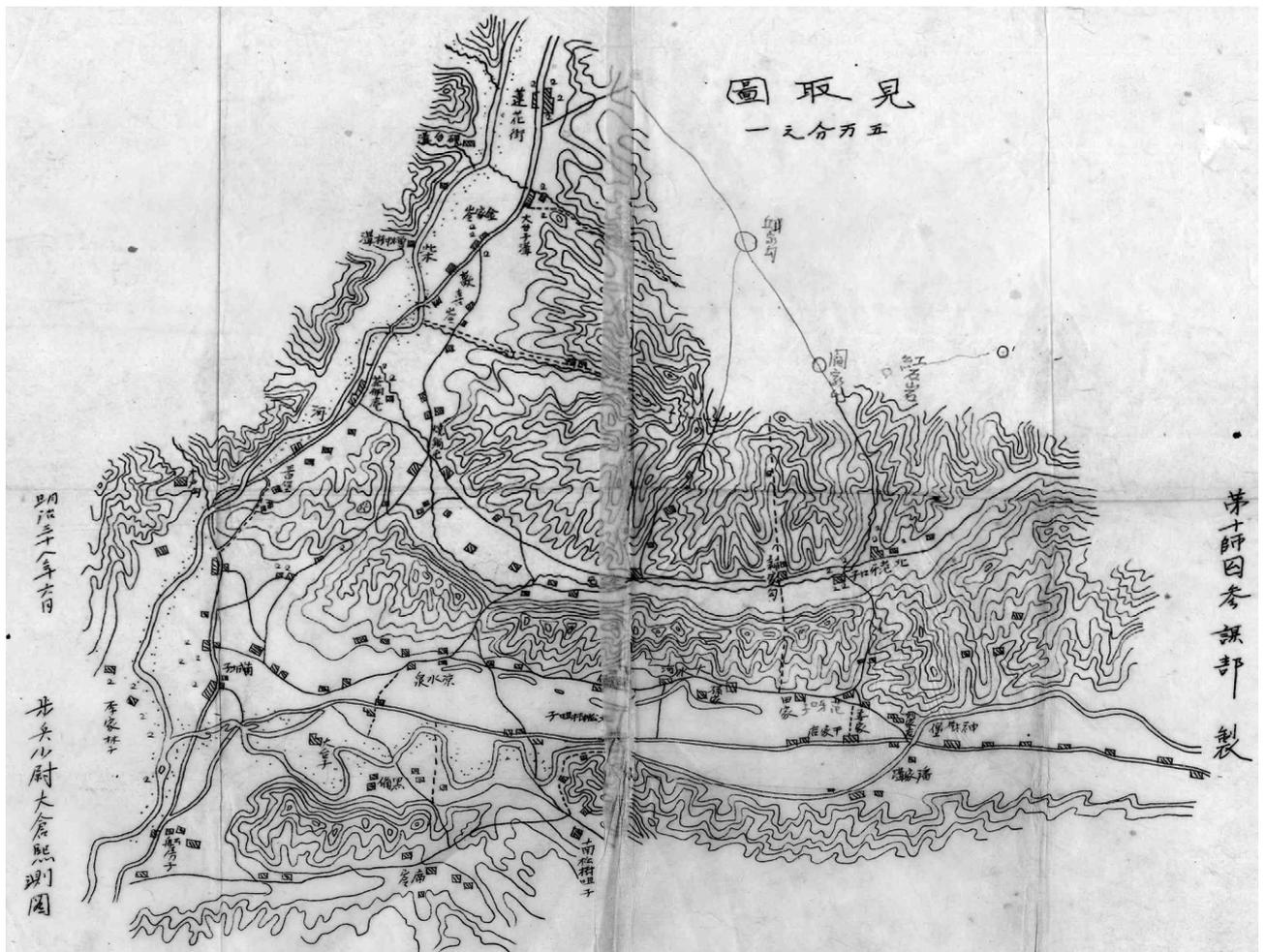


図 10. ⑤ 「見取圖」(南城子付近) (5 万分 1)

第十師団参謀部製。

原図×0.47。